講義の「談話型」に基づく受講ノートの「文章型」の分析

田中　啓行

1. はじめに

2008 年 6 月の表現学会第 45 回大会で行われた、「講義の談話の表現から理解へ」と題するシンポジウムにおいて、理解の側面から講義の談話の全体的構造と表現特性が議論された。

講義を聞きながら取る「受講ノート」は、空間配置や記号も利用して記されるが、事後にノートを読む際には、絵画のように全体を瞬時に把握するのではなく、記号も含めた文字列を一定の順序に従って読まねばならない。市川（1978：36-37）は文章を 3 類 18 種に分類したが、そのうちの「記録の文章」にあたると考えられる。また、西條（2000、2001）は、講義の構造を把握して簡潔にノートを取ることが講義理解のために重要であることを指摘している。

本研究は、シンポジウムの共通資料である講義の談話と、その受講ノートを資料とし、受講ノートの表現類型である「文章型」を分析する。受講者がどのように講義の構造を把握し、受講ノートに写し取るのかを明らかにすることが本稿の目的である。

なお、本稿は、筆者が研究協力者として参加した西條美紀研究代表者（2007）の科研費の研究を含む、早稲田大学の「文章・談話研究会」の共同研究の成果の一部である。共同研究において収集された講義 A の談話の文字化資料と、講義 A を受講する学部学生の受講ノートを分析資料とする [1)]。受講ノートの元となる講義 A の談話を「原話 A」、分析対象とする受講ノートを「ノート AN」と呼ぶ。

2. 分析の枠組み

講義の談話を表現と理解の両面から分析した佐久間編著（2010）は、本稿が分析対象とする講義 A を含む講義の談話 12 資料について分析している。「段」を、「談話の『話段』と文章の『文段』の総称」（佐久間編著 2010：45）であり、「『中心文 [2)]』（『統括文』）と、文章・談話の全体を統括する『主題文』の統括機能が及ぶ範囲に含まれる複数の文のまとまり」（佐久間編著 2010：45-46）と規定し、「話段」を認定している。

【図 1】は、佐久間（2008）、佐久間編著（2010）の認定した講義 A の話段を示したものである。同書では、講義の談話構造に関して、佐久間編（1989、1994）の要約文調査に基づく以下の全 6 種の「文章構成類型」（以下、「文章型」と称する）を用いて、12 の講義の談話資料の「談話型」の分析が行われている。

（1）頭括型　（2）尾括型　（3）中括型
（4）両括型　（5）分括型　（6）潜括型

（1）頭括型は開始部、（2）尾括型は終了

部、(3)中括型は展開部、(4)両括型は開始部と終了部に、「主題文」を有する「中心話段」が位置する談話の構造類型である。講義Aは、「Ⅲ.終了部」の話段6「本日の講義内容のまとめ」が全体を統括する(2)尾括型の「談話型」の講義に分類されている。

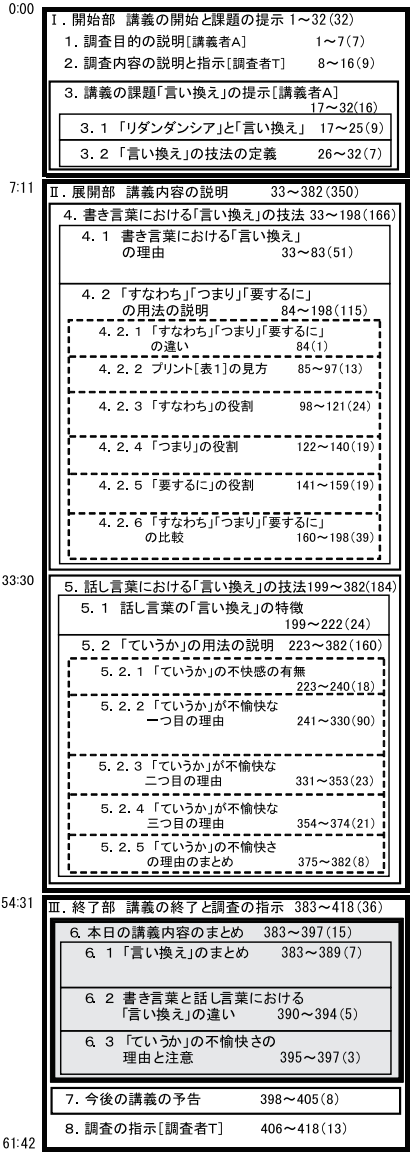
また、同書は「情報伝達単位(CU)」16類35種[3)]を作業仮説単位として用いた「残存認定作業」により、原話である講義のどの部分が理解データである要約文と受講ノートに残っているかを認定し、理解データの分析を行っている。

藤村・朴(2010)は、講義Aを聞いた後に受講者が書いた要約文AYについて、理解類型の分析と表現類型である「文章型」の分析を行っている。小沼・田中(2010)では、要約文研究の方法論を応用し、CUを用いて、要約文AYと共通の受講者が書いた講義Aの受講ノートAN27名分を分析し、原話のどのCUが受講ノートに多く残存するのかについて分析を行った。

本稿は、佐久間編著(2010)の認定による講義Aの話段に従う。また、佐久間編著(2010)の「段」、「中心文」の規定に従い、ノートANの「文段」、「文章型」の認定を行う。ノートANの「文章型」の認定にあたって、佐久間(1990)が以下のように分類した文の連接関係の基本的類型に従って、ノートANの文段間の連接関係を認定する。

1. 順接型「①→②」　2. 逆接型「①Z②」
3. 添加型「①＋②」　4. 対比型「①↔②」
5. 転換型「①↓②」　6. 同列型「①＝②」
7. 補足型「①←②」　8. 連鎖型「①－②」

【図1】講義Aの談話型



佐久間(2008：10)

3. 分析資料

3.1 講義の談話

原話 A は、30 代の男性講義者 A による約 60 分の「文章表現論」の講義で、「言い換え」の技法について説明している。全 418 文、総 CU 数は 3,870 単位である。概要は以下の通りである。

接続表現による「言い換え」の技法について、まず、「リダンダンシア」を例に定義をし、次に、書き言葉の「言い換え」の特徴として、接続表現「すなわち」「つまり」「要するに」の用法を述べる。さらに、話し言葉の「言い換え」について、接続表現「ていうか」の用法を説明し、最後に、講義内容の要点をまとめ、次回の予告をする。（第 45 回表現学会シンポジウム共通資料より）

（例 1）【AN27】（2）尾括型

No.1

1 （リダンダンシア…述語が出てくるたびに別のことばに言いかえながらしゃべるトレーニング
ex.「朝ねぼうして…おそくおきて…いそいでごはんをたべて…ごはんをかきこんで…」
→言い換えのむずかしさをあらわす。）

2 言い換え…書きことばでは考えれば、一番適切な表現を選べるのに
何故複数の表現をつかうのか？
→読み手にわかりやすく

3 一つのことがらに 2 つの表現を示すこと
→ひとつのことがらを 2 つの側面からとらえること

言い換えのパターン

4 ○難しい―やさしい → 先週のプリント（10） 専門用語の説明 5
表現 表現

○詳しい―簡潔な → 先週のプリント（6） 6
表現 表現

○ぐたいてき―象徴的な → 〃 （9） 言いかえることによって 7
表現 表現 記憶につなぎとめる

8 ＜今週の表の説明＞

9 ・“すなわち”が優勢なもの
（11） つまりだと少し異和感が、要するにだとかなり異和感が…

10 “すなわち”は記号“＝”にもっともちかいと考えられるもの。
スポーツと運動はほとんど同じ

11 （12）「“女子供向け”すなわち“下らない”」 AisB のはたらき 繋辞用法
A B

13 ←毎日新聞のデータでもわかるようにいちばんつかわれている、つかいやすい

12 ・“つまり”が優勢なもの
（2）因果関係
言いかえといっても原因結果をあらわす。
“→”のはたらきをする

14 はなしての解釈をくわえて読み手にとってわかりやすいところに帰着する。
身近でわかりやすいものにいいかえる

15 ・“要するに”が優勢なもの
（3）

16 少し危険なことば
いきなり核芯をつく。
かなりはなれた関係のものでも結びつけることができる
つまり「詰まり」のように凝縮して示すのではなく結論をいきなりとってくるかんじ

No.2

17 “すなわち”と“要するに”の二種類がよくつかわれている
例文はない → “すなわち”と“要するに”の間に
“つまり”がある

18 （5）の例では （11）の運動とスポーツにくらべて“＝”でむすぶのに少しあたまをつかう。
→話し手の解釈が加わっているから → “つまり”をつかう人がふえている
“すなわち”と“つまり”の境界は解釈のぐあいによる。

19 (9)の例では　“つまり”と“要するに”

A“つまり”B　のAの部分がはっきりしなくてもつかえるのが“要するに”

20 “つまり”←長い文を
“要するに”←みじかい文を　つぐときにつかうことが多い

21 はなしことばによる言いかえ　…　上書きというか即興的な言い換え。

34 いいかえ
目上の人が
下の人のことば
にたいして
すること

“じゃなくて”と“ていうか”がよくつかわれる。 22

“じゃなくて”より“ていうか”の方がおだやかなことば。色々な言いかえができる。 23
いちばん良いことばをさがす思考のプロセスなのだからとても謙虚なことば
なはずなのに　どうして　不快に感じられるのか

35 自分達の論理のおしつけだから
相手を見下しているようだから

実は「ていうか」には不快に感じさせる用法とそうでない用法がある。 24

(1)は不快ではない例。相手のことばを否定しまいという心づかい。 25

(2)、(3)は不愉快にさせる例。←「ていうか」が相手のことばを言いかえる例。 26

27 2タイプ 接続詞
「そして?」←自分の話の中にじかつかえない
「それで?」←相手の発話にも言及できる接続詞

28 「ていうか」には言及できるていうかと
言及できないていうかがある

29 相手のことばをそのままうけいれないで、言いかえている。

30 (4)(5)　論理の飛躍　…　他人の話題をとるために「ていうか」をつかう。
→内面のおしつけのようにとられてしまう

31 (6)　論理の飛躍

33 ①自分の論理内面のおしつけが
不愉快に感じさせる。
相手のことばをすなおにうけ
いれないで再解釈してしまう

32 (7)　何の「ていうか」かわからない
自分たちの論理のおしつけ

36 (8)(9)話題の導入につかう例

37 ②言い換えられることばがないのに出てくる気持ち悪さ。

38 ③「ていうか」ということばの語感がかるく感じられる
候補のひとつをあげているにすぎない
あいまいさ

No.3

39 まとめ

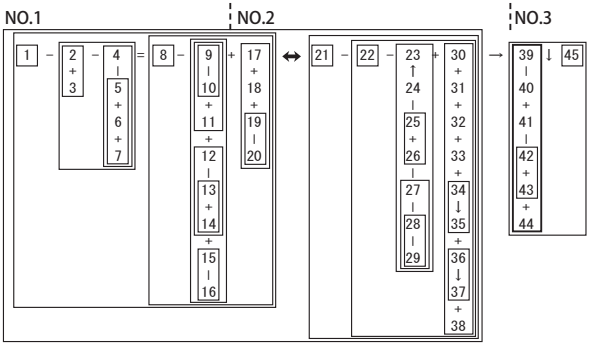
40 言いかえ
ことばさがしのプロセスにおける言語化

41 いいかえ
at 書きことば　…　戦略的で意図的な言いかえ 42
43 at 話しことば　…　即興的。反手の反応や自分のことばを耳にして
あまりよくないと思ったときに

44 相手のことばを言いかえることにより　「ていうか」が不快に感じられる
ようになった　①、②、③の理由から

45 次々回は「書き終わるときはどういうふうにしたらよいか」をはなす。

【図２】AN27の「文段」の連接関係



3.2 受講ノート AN

分析資料とした受講ノートは、講義 A の受講者が講義を聞きながら書いた受講ノート AN54 名分[4]（AN1 ～ AN55）である。総 CU 数は 7,788 単位（1 人当たり 144.2 単位）である。

原話 A のどんな要素が残存するかということを判定するために、佐久間編著（2010）と同様に CU を用いて、複数者による原話の「残存認定作業」を行った[5]。

ノートの「文章型」の分析にあたって、手書きのノートをワープロソフトで入力し、入力データに受講ノートの「文段」を書き入れた。（例 1）は AN27 を入力したものである[6]。本研究では、ノート AN の「文章型」の特徴を明らかにするため、藤村・朴（2010）において認定された要約文 AY の「文章型」との比較を行う。そのため、ノート AN を、以下のように分ける。

①ノート AN Ⅰ（AN1 ～ AN28）：講義後に講義 A の要約文 AY を書いた 27 名

②ノート AN Ⅱ（AN29 ～ AN55）：講義後に講義 A の要約文 AY を書いていない 27 名

要約文 AY と同じ受講者のノート AN Ⅰを比較するが、ノート AN の傾向をより詳しく見るため、ノート AN Ⅱの 27 名分も加えて分析を行う。

4. 受講ノートの「文章型」

4.1 受講ノートの「文章型」の認定方法

受講ノートの「文章型」の認定は、以下の手順で行う。

①佐久間編著（2010）の「中心文」「段」の規定を参考に、受講ノートに記された「話題」とその統括が及ぶ範囲から、受講ノートの「文段」を認定する

②佐久間（1990）の連接関係の分類を用いて、「文段」の連接関係、全体を統括する「中心段」を認定し、受講ノートの「文章型」を決定する

64、65 頁の（例 1）は、ノート AN27 の「文段」を認定し、入力データに記入したものである。受講ノートは原則として左から右、上から下へと記されるものであると考え、「文段」も左から右、上から下の順に認定した。ノートの中には縦書きの部分や、すでに書いた記述に付け加えられている部分もあるため、認定の際には、「残存認定作業」の結果を参照し、原話のどの部分をノートに記したのかということも加味した。

【表 1】要約文 AY とノート AN の「文章型」

資料＼文章型	(1)頭括型	(2)尾括型	(3)中括型	(4)両括型	(5)分括型	(6)潜括型	その他（判定不可能）	合計
要約文 AY（AY1 ～ 28）	13（46.43）	3（10.71）	0（0.0）	7（25.00）	2（7.14）	0（0.0）	3（10.71）	28（100.00）
受講ノート AN Ⅰ（AN1 ～ 28）	8（29.63）	15（55.56）	0（0.0）	0（0.00）	4（14.81）	0（0.0）	0（0.0）	27（100.00）
受講ノート AN Ⅱ（AN29 ～ 55）	8（29.63）	11（40.74）	2（7.41）	1（3.70）	5（18.52）	0（0.0）	0（0.0）	27（100.00）
受講ノート AN 合計	16（29.63）	26（48.15）	2（3.70）	1（1.85）	9（16.67）	0（0.0）	0（0.0）	54（100.00）

（　　）内の数字は、合計に対するパーセンテージを示す。
藤村・朴（2010：232）より作成

4.2 分析結果

【表 1】は、藤村・朴（2010）の要約文 AY の「文章型」の分類結果に、ノート AN の「文章型」の結果を加えたものである。

ノート AN 全体では、(2) 尾括型が 26 例（48.15%）ともっとも多く、続いて (1) 頭括型（16 例、29.63%）、(5) 分括型（9 例、16.67%）が多い。ノート AN Ⅰは、(2) 尾括型（15 例、55.56%）がもっとも多く、(1) 頭括型（8 例、29.63%）、(5) 分括型（4 例、14.81%）の順となっている。ノート AN Ⅱも同様に、(2) 尾括型が 11 例（40.74%）ともっとも多く、(1) 頭括型（8 例、29.63%）、(5) 分括型（5 例、18.52%）の順になっている。ノート AN Ⅱには、(3) 中括型が 2 例（7.41%）、(4) 両括型が 1 例（3.70%）見られるが、ノート AN 全体の傾向として、(2) 尾括型が多く、次に (1) 頭括型、(5) 分括型が多いということが言える。

要約文 AY は、(1) 頭括型が 13 例（46.43%）ともっとも多く、次に (4) 両括型 7 例（25.00%）となっており、ノート AN とは違う傾向が見られる。要約文 AY は、字数制限もあり、講義をすべて聞いた後で書いているため、再構成して重要なことを最初に書いている。ノート AN は、講義を聞きながら書いていること、字数に制限がないことから、要約文 AY との違いが出ているものと思われる。原話 A は (2) 尾括型の談話であり、原話に沿ってノートを記すことで原話の「談話型」がノートに反映されている。このことから、受講ノートは過程的な理解を示すと考えられる。

4.3「文章型」ごとのノート AN の特徴

4.3.1 (2) 尾括型のノート AN（26 例）

(2) 尾括型のノート AN は、原話 A の話の展開に沿ってノートを記しているものである。原話 A のまとめとなる「Ⅲ. 終了部」の内容をノートの末尾に書くことで、(2) 尾括型となっている。

（例 1）の AN27 は、(2) 尾括型のノート AN の例である。65 頁の【図 2】は AN27 の「文段」の連接関係を示す。AN27 は、原話 A の「Ⅰ. 開始部」にある講義の前置きである「リダンダンシア」の話から順に、「Ⅲ. 終了部」までをノートに記している。文段 38 までで、「言い換えの定義」「書き言葉における言い換え」「話し言葉における言い換え」について記し、その内容を文段 39 からの「まとめ」において、もう一度記す形で全体をまとめている。その結果、文段 39 を「中心段」とする (2) 尾括型の受講ノートとなっている。

4.3.2 (1) 頭括型のノート AN（16 例）

(1) 頭括型のノート AN は、ノートの冒頭にノート全体を統括する中心段があるが、その中心段の内容によって、2 種類に分けられる。

a.「言い換え」についての課題設定、説明がノートの冒頭にあるもの

原話 A は、まず「言い換え」の定義をし、その後、「書き言葉における言い換え」と「話し言葉における言い換え」を対照的に説明している。原話 A は「Ⅲ. 終了部」でそれらについてもう一度説明することで全体をまとめているが、(1) 頭括型のノートは、ノートの末尾に原話 A の「Ⅲ. 終了部」の内容を記していない。そ

（例 2）【AN1】（1）頭括型

1 言い換え とは ⇒ 読者への歩み寄りである。 より明確に伝えられる。 二つの側面をみせられる（象徴と具体）

2 すなわち → 「イコール」にもっとも近い
話し手が解釈をほとんど加えないでも 即座に言い換えられる。
（ex 運動 すなわち スポーツ）
形而用法 ほとんど使われない

3 つまり → 因果関係をあらわすことが多い。話し手の解釈が入る。 話まり
「＝」ではなく「→」で示されるのが近い。
読み手にとって●わかり易いところに帰着する

4 要するに→ 極端な言い換えもできる。 ・ 話のポイントを取り出す感じ
話し手の解釈が入る

5 っていうか→ 話しことばの 言い換え（準備されたもの）とは、 言い直し（言い出してからの上書き）のことである。

6 不愉快に思われる原因…
相手の言葉を言及する性質ももっている。
〃 を再解釈する（ex「寒いね」「ていうか寒過ぎだよね」）

7 ↑
・素直に共感していないように感じられる

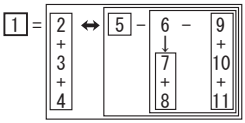
8 ・再解釈はふつう立場が上の人がやること

9 1. 素直じゃないから

10 2. 唐突な印象だから

11 3. あいまいさもぬぐえないから

【図 3】AN1 の「文段」の連接関係



のことで、「言い換え」の定義が総論として全体をまとめる形になっている。（例 2）は、文段 1 の「言い換え」の総論的な内容を記している部分が全体を統括する「中心段」となる（1）頭括型のノート AN1 の例である。【図 3】は AN1 の「文段」の連接関係を示す。

b. 原話 A の「Ⅲ . 終了部」の内容をノートの冒頭に加えたもの

（1）頭括型のもう一つのパターンとして、原話 A の「Ⅲ . 終了部」の内容をノートの末尾ではなく、冒頭に記しているものがある。（例 4）は AN32 の冒頭部であるが、原話 A の「Ⅲ . 終了部」の文 A-389 の内容である「言葉さがしのプロセスの言語化」をノートの冒頭に挿入する形で記している。「Ⅲ . 終了部」が講義全体の主題であることを明示しようとする、受講者の再構成の意識が見て取れる。受講ノートは、原則として講義の話に沿って取っていくが、部分的には再構成がなされていることがわかる。

（例 3）【原話 A】

話段 6.1「『言い換え』のまとめ」

A-389 その言葉探しの、あのー、プロセスのー、言語化がー、この、言い換えだろうと思います。

（例 4）【AN32】（1）頭括型

2 書き言葉 ←後にすいこうすることができる
どうして“言い換え”が残るのか？

1 言葉さがしのプロセス
の言語化
→言いかえ

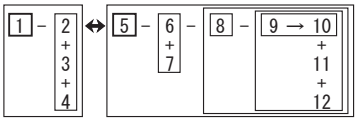
4.3.3 (5)分括型のノート AN(9 例)

(5)分括型のノート AN は、原話 A の「Ⅲ . 終了部」をノートの末尾に記しておらず、「Ⅱ . 展開部」の内容を中心に記しているものである。(5)分括型のノート AN には、「Ⅱ . 展開部」の話題のとらえ方によって、2 つのパターンが見られた。

a.「書き言葉における言い換え」と「話し言葉における言い換え」を対照的に記したもの

(例 5)の AN35 は「書き言葉における言い換え」と「話し言葉における言い換え」を対照的に記しているノートである。文段 1 と 5 が「中心段」となる。書き言葉と話し言葉のそれぞれにおける「言い換え」について、原話 A の「Ⅱ . 展開部」の対照的な説明を把握しているノートであると言える。

【図 4 】AN35 の「文段」の連接関係



b.「すなわち」「つまり」「要するに」「ていうか」の各接続詞の説明を列挙したもの

原話 A は、書き言葉の接続詞である「すなわち」「つまり」「要するに」、話し言葉の接続詞である「ていうか」について、書き言葉の場合と話し言葉の場合に分けて説明している。

(5)分括型に分類されるノートの中には、「書き言葉における言い換え」と「話し言葉における言い換え」を対照させるのではなく、「すなわち」「つまり」「要するに」「ていうか」の 4 接続詞を並列しているものが見られる。原話 A の「Ⅲ . 終了部」の「書き言葉」と「話し言葉」を対照している部分を記していれば、(2)尾括型のノートとなるが、「Ⅲ . 終了部」をノートに記していないため、各接続詞の説明の文段がそれぞれ同等の統括力を持つと考えられ、(5)分括型となる。

このように、原話 A の「Ⅱ . 展開部」のとらえ方に違いが出てくる要因として、原話 A の話題の提示の仕方があると考えられる。

(例 5)【AN35】(5)分括型

1 書き言葉の言い換え　推敲できる⇒意図的・戦略的
2 すなわち… イコールに近い　話し手の解釈が含まれない
　繋辞用法(= AisB の is)　語句＋語句
3 つまり　… すなわち と 要するに の中間　矢印でおきかえられる
　分かりやすいことばへの言い換え　最も幅広く用いられる
4 要するに… 極端な言い換え、言い換えとはいえない場合でも可
　短い文におきかえる　文以上 ＋ 文以上のときに使う
5 話し言葉の言い換え　「ていうか」
6 より良い言い回し・ふさわしい言い回しへの即興的なおきかえ
7 思考のプロセス・言葉さがしの言語化　「じゃなくて」より丁寧
8 不愉快に感じるとき
9 ・相手の言葉を否定・再解釈(5)(6)――見下されている印象を与える
10 ↓ 論理の飛躍(4)(5)・自分の意見を押しつける(6)(7)
11 ・話題の導入に用いる(8)(9) ― 唐突で不自然
12 ・語感が軽い　候補を 1 つ挙げているだけであいまい

(例 6)【原話 A 】

話段 4.2「『すなわち』『つまり』『要するに』の説明」

A-084 まあ、書き言葉における言い換えというのは、以上のような、まあ、理由で行われるんだろうと思いますが、(4) それぞれ、えっと、「すなわち」と「つまり」と「要するに」、ま、「ていうか」まで入ってますけれども、「ていうか」は、ま、話し言葉専門なんで、後で説明することにしますが、「すなわち」「つまり」

「要するに」、この三つの言葉が、あの、どういうニュアンスの違いを持って、どういう役割を果たしているか、ということを少し見たいと思います。

話段 5.1「話し言葉の『言い換え』の特徴」

A-199（8）で、えっと、さて、今度は、話し言葉における言い換えというのを考えてみたいと思います。

A-200 で、話し言葉における言い換えというのは、まあ、典型的には、さっき言った、「っていうか」、もう少し、その、フォーマルな形で言えば、「というか」というものがよく使われます。

A-201（8）で、話し言葉における言い換えというのは、基本的に、言い換えというよりも、言い直し、と思われることのほうが多いんですね↑。

（例 6）の文 A-084 は、書き言葉において使われる接続詞について説明する話段 4.2 の冒頭の文であるが、「『すなわち』と『つまり』と『要するに』、ま、『ていうか』まで入ってますけれども、」と、話し言葉で使われる接続詞「ていうか」までを並べて提示している。また、「話し言葉における言い換え」の説明に入る話段 5.1 の冒頭では、（例 6）の文 A-199 で、「さて、今度は、話し言葉における言い換えというのを考えてみたいと思います」とはっきりと話題を提示しているのに対し、「書き言葉における言い換え」という話題は「話し言葉における言い換え」ほどはっきりとは提示されない。このことと、文 A-084 の話題の提示の仕方が、談話の構造の理解にゆれが出る要因となっていると考えられる。

4.3.4 その他の「文章型」

他に、（3）中括型が 2 例、（4）両括型が 1 例見られたが、これらは、「すなわち」「つまり」「要するに」「ていうか」のうち、まったく説明が書かれていない接続詞があるなど、記述に足りないところがあるノートである。

5. 結論

ノート AN の「文章型」は、（2）尾括型が多く、原話 A の「談話型」を反映しており、（1）頭括型の「文章型」が多い要約文 AY とは違いが見られる。要約文は講義を聞いた後の結果的な理解を示すのに対し、受講ノートは講義を聞いている時点での過程的な理解を示すためだと思われる。また、原話の「Ⅲ . 終了部」の内容を冒頭に記すことで（1）頭括型になっているノートもあり、講義の内容の再構成も見られた。

一方で、「Ⅲ . 終了部」の内容を記していないノートもある。受講者によって、「Ⅲ . 終了部」を講義者による講義内容の整理として重要な部分ととらえるか、単なる「Ⅱ . 展開部」の内容の繰り返しとしてとらえるかという違いがあると考えられる。

ノートの「文段」、「文章型」を認定することで、受講者による原話 A の「Ⅱ . 展開部」、「Ⅲ . 終了部」の把握の仕方に違いがあることが明らかになった。受講ノートの「文段」、「文章型」を認定することは意義のあることであると考える。認定したうえで、各受講者の講義の構造把握が妥当なものであるか、講義の談話構造から評価することができる。例えば、原話 A では、「Ⅲ . 終了部」で「言葉探しのプロセスの言語化」のような初出の概念を使って講義内容を再整理しており、「Ⅲ . 終了部」を単なる繰り返しととらえずに、「Ⅲ . 終了部」の内容を記しているノートは良い評価を与えられるものと判

断することができる。

評価にあたっては、より細かい構造の分析や理解度などの構造以外の分析も必要であり、評価の観点をふまえてこれらの分析を行うことが今後の課題となる。また、(2)尾括型ではない「談話型」の講義の受講ノートの分析も課題である。

注

1)研究会代表の佐久間まゆみ教授から分析資料（講義 A の談話、ノート AN）の使用、および本稿執筆についての許可をいただいた。

2)「文と文章・談話の中間に位置する『段』の中核となる文であり、同一の話題を表す他の文集合をまとめる『統括機能』を有する『統括文』」(佐久間編著 2010：47)

3）1. 文末叙述表現　2. 節末叙述表現
3. 修飾表現　4. 引用表現　5. 提題表現
6. 状況表現　7. 注釈表現　8. 接続表現
9. 応対表現　10. 参照表現　11. 感応表現
12. 反復表現　13. 省略表現　14. 挿入表現
15. 転換表現　16. 非言語表現
（佐久間編著 2010：32-33 より）

4)ノートを未提出の受講者（AN15）がいるため、受講者番号は AN55 までとなっている。

5)早稲田大学大学院日本語教育研究科博士後期課程の伊能裕晃氏、安明姫氏、信森あづさ氏、田口みゆき氏、寅丸真澄氏と筆者が残存認定作業を行った。

6)用例中の点線の囲みは、認定した「文段」を示し、囲みの外の数字はノートの文段番号を示す。また、用例中の「No.1」は、ノートの 1 枚目であることを示す。(例 1) の AN27 は、ノートを 3 枚の用紙にわたって書いている。

参考文献

市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版

西條美紀（2000）「談話構造図作成法によるノートテーキング」『講座日本語教育』第 36 分冊　早稲田大学日本語研究教育センター　pp.53-68

――――（2001）「談話構造図作成法によるノートテーキングの訓練効果について」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』14　pp.123-136

西條美紀研究代表者（2007）『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発』平成 16 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）研究成果報告書

佐久間まゆみ（1990）「「文段」認定の一基準（Ⅱ）――接続表現の統括――」『文藝言語研究　言語篇』17　pp.35-66

――――――（1994）『要約文の表現類型――国語教育と日本語教育のために――』ひつじ書房

――――――（1995）「中心文の『段』統括機能」『日本女子大学紀要　文学部』44 pp.93-109

――――――（2008）「講義の談話の話段と全体的構造」『表現研究』88　pp.5-14

佐久間まゆみ編（1989）『文章構造と要約文の諸相』くろしお出版

――――――編著（2010）『講義の談話の表現と理解』くろしお出版

――――――（2010）「第 3 章　講義の談話の展開的構造」佐久間編著（2010）pp.45-71

藤村知子・朴恵煐(2010)「第 11 章　講義要約の理解と表現」佐久間編著（2010）

pp.206-240
小沼喜好・田中啓行（2010）「第 12 章 受講ノートの理解と表現」佐久間編著（2010）pp.241-256
田中啓行（2009）「受講ノートの文の認定と文末文体」『早稲田日本語研究』18 pp.36-47
日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク情報保障評価事業グループ編著（2007）『大学ノートテイク支援ハンドブック』人間社

【付記】本稿は、第 47 回表現学会全国大会での研究発表を加筆修正したものである。会場の皆様から有益なご助言を賜りましたことを心より感謝申し上げます。また、共同研究のデータ使用を許可してくださった、文章・談話研究会代表の佐久間まゆみ教授、科研費の研究代表者の西條美紀教授に感謝申し上げます。

（早稲田大学大学院生）

◇表現研究関係文献紹介

佐久間まゆみ編著『講義の談話の表現と理解』（くろしお出版、平成 22 年 3 月刊、¥3,800）

表現学会第 45 回大会（平成 20 年）のシンポジウムは「講義の談話の表現から理解へ」であった。このシンポジウムの記録が『表現研究』第 88 号に掲載されている。当日の司会・パネラー等を中心として大学の講義の談話分析が継続されているが、本書はそれを現時点において集約したもので、構造分析・表現特性・講義理解の三つの課題を検討する。

いくつかの特徴が指摘できる。先ず、分析の単位と基礎概念が明確であること。情報伝達単位、文・発話、話段・談話型、中心文がそれである。記述方法と分類基準も明示的である。これらは、要約文の研究成果に基づくところが大きい。

次に、具体的な分析が、文字化資料として掲載された二つの講義を中核として行われていること。各章で共通の資料を縦横から取りあげているので、複雑な記述が理解しやすいものとなっている。その分析は、談話の展開構造をはじめ、提題・叙述表現、反復・指示・接続・メタ言語表現、引用と参照、非言語行動（身ぶり）にわたり、それぞれ先行研究と分析方法が丁寧に記されている。

講義要約の分析は、これまでの要約文の研究を踏まえ、深化されている。受講ノートの理解と表現の分析も要約文の研究と関連し、さらなる展開が期待できる。

理論的には、言語単位と提題・叙述表現や中心文の重要性が再認識され、実用的な面では、いわゆる FD にもかかわる。刺激的な一冊である。　（野村眞木夫）